

「日本 のかたち を描く」

人物と機関



領土・主権展示館 企画展
『日本の「かたち」を描く』小冊子

人物と機関

2024年2月
領土・主権展示館

※この小冊子は、最新の研究も含めて紹介するものであり、個別の記述内容が必ずしも政府の見解を代表するものではありません。

目次

石川流宣	4
長久保赤水	6
近藤重蔵	8
伊能忠敬	10
シーボルト	12
勝海舟	14
長崎海軍伝習所と幕府海軍	16
蕃書調所と開成所	18
塚本明毅	20
杉浦 讓・荒井郁之助	22
陸軍参謀局から陸地測量部へ	24
小菅智淵	26
柳 檣悦	28
シルビア号	30
大後秀勝	32
瀬脇寿人	34
花房義質	36
北澤正誠	38

石川流宣

(生没年不詳)

17世紀末(元禄の頃)、初期浮世絵の花形として登場した石川流宣。その師は、浮世絵の祖と称され「見返り美人図」で有名な菱川師宣といわれています。流宣は浮世絵師としての活躍のほか、世界図・日本図・江戸図を刊行するなど才能は多岐にわたり、当時の代表的な地図(絵図)作製者のひとりとして人気を博しました。

流宣が手掛けた日本図の中でも特に有名な「日本海山潮陸図」(1691年)や、その前身である「本朝図鑑綱目」(1687年)などは、「流宣図」と呼ばれています。その特徴は、海岸線の凹凸を誇張しデフォルメされたフォルムや、これまで墨一色であった木版画に色彩豊かな着色を施すなど、絵画的な美しさや見やすさを追求。さらに、各地の名所・旧跡・河川・山岳の地理情報や、江戸を発着とする交通案内、城主名や石高を記載するなど武鑑的な要素も盛り込まれました。

芸術性と実用性を兼ね備え、観光案内図としても親しまれた「流宣図」は、初版を手掛けた江戸の板元・相模屋太兵衛の手を離れた後も、別の板元へと引き継がれていきます。そして最新の情報を維持すべく、大名の国替など情報のアップデートにも対応して30近い改訂を続け、約1世紀にわたり大衆に愛されるロングセラー商品となりました。



「本朝図鑑綱目」(1687年)

神戸市立博物館蔵

なが く ぼ せき すい 長久保赤水

(1717年～1801年)



長久保赤水自画像

所蔵:高萩市歴史民俗資料館

江戸時代、水戸藩の儒学者であった長久保赤水。日本地図の完成者として名高い伊能忠敬よりも約40年早い18世紀後半に、正確性を志向した日本地図を作製し、日本地図の先駆者とも呼ばれています。

1717(享保2)年、赤水は常陸国多賀郡赤浜村(現・茨城県高萩市)の農家に生まれます。幼い頃から勉強熱心で、1730(享保15)年に医者すずきげんじゆんの鈴木玄淳の塾に通い、その後、水戸藩の儒学者である名越南溪なごやなんけいに師事。1768(明和5)年に、学問の功績が認められ水戸藩郷士格ごうしかくとなりました。さらに、1777(安永6)年には農民からは異例出世となる、水戸藩第6代藩主・徳川治保とくがわはるもりの侍講じこうとなり、江戸小石川の水戸藩邸に移り住みます。

そして1779(安永8)年、20年もの歳月を費やした「改正日本輿地路程全図」かいせいにほんよちろていぜんずを完成(翌年出版)。製作のために全国各地の地図や地理に関する書物を収集するほか、旅人の話や、天文学の知識を盛り込み、校訂・編纂へんさんを重ねて作り上げた高水準の日本地図は「赤水図」と呼ばれ、市井の人々に浸透していきます。これは、世の中の求めるものが、美しいもの(絵図)から正しいもの(地図)へと変化してきていることを象徴する事象でもありました。

その後も『大日本史』地理志の編纂などに励み、1801(享和元)年に郷里の赤浜村にてその生涯を閉じました。偶然にも赤水の没後10日目に、伊能忠敬の測量隊が赤浜村を通過したことが、忠敬の測量日記に記されています。

こん どう じゅう ぞう
近藤重蔵
(1771年～1829年)



近藤重蔵肖像
所蔵:函館市中央図書館

近藤は、江戸時代後期の旗本で、北方地域を探検したことでも知られています。

1795(寛政7)年、長崎奉行手附出役てつきしゅつやくに登用されますが、この時期は蝦夷地に異国船の来航が相次ぎ、ロシア使節ラクスマンのほか、1796(寛政8)年には、イギリス海軍士官ブロートンが、内浦湾うちうらわんに面する虻田あぶたに停泊。ブロートンの主な活動目的は、蝦夷、樺太、千島列島周辺を調査、測量して正確な地理を把握することでした。これらの動きに対し、幕府は警戒感を強めていきます。

近藤は、幕命により最上徳内もがみとくないとともに、1798(寛政10)年、国後島くなしりとうと択捉島えとろふとうを調査し、択捉島に「大日本恵登呂府だいにほんえろろふ」の標柱を立てました。そして、千島アイヌなどから情報を得て、蝦夷地・千島・樺太・カムチャツカの地図(「蝦夷地図式 乾坤」)えぞちずしき けんこんを作製したほか、当時としては詳細な北方情報を収録した『辺要分界へんようぶんかい図考』ずこうを著します。

また、ロシアの南進に備え、択捉島の漁場の開設や、郷村制ごうそんせいを実施するなど開拓にも従事しました。

伊能忠敬

(1745年～1818年)



伊能忠敬肖像
所蔵:千葉県香取市 伊能忠敬記念館

伊能忠敬は江戸時代、日本ではじめて実測により日本地図を製作しました。現在の千葉県九十九里町の出身で、17歳のとき、佐原さ かわら(現・香取市佐原)の伊能家の婿養子となり、当主として酒造業や運送業などを営みました。

家督を長男に譲り隠居した忠敬は、50歳で江戸に出て、幕府天文方たか はし よし と きの高橋至時に師事し、天文学や測量を学びます。そして、地球の大きさを知りたいという忠敬の動機をきっかけとして、至時は蝦夷地え そ ちまでの測量と地図作りを幕府首脳部に願い出て、その担当者として忠敬を推薦しました。忠敬は1800(寛政12)年に幕府の許可を得て、55歳で東北・北海道南部を測量します(第1次測量)。忠敬が測量をはじめた時期は、1792(寛政4)年に、ロシア使節ラクスマンが通商を求めて根室に来航したことなどもあり、北方地域の緊張が高まっていました。幕府は国防上の観点から、海岸線の把握と正確な地図の必要性を認識していたのです。

第4次測量までの成果として提出された東日本の地図を幕府は高く評価。忠敬は幕臣に登用されます。忠敬は1816(文化13)年の第10次まで、17年間にわたり測量を実施し(第9次は不参加)、その後、地図の作製に取り掛かりました。しかし、残念ながら完成を見る前に亡くなってしまい、作業を引き継いだ弟子たちの手によって、1821(文政4)年に「大日本沿海輿地全図だい に ほん へん かい よ ち ぜん ず」が完成。幕府に献上されました。

シーボルト

(1796年~1866年)

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト(1796-1866)はドイツ人医師であり博物学者です。ドイツのヴェルツブルクにある医学界の名門貴族の家に生まれました。日本研究のため、オランダ商館付医官として、1823(文政6)年、来日します。

長崎郊外に鳴滝塾なる たきじゅくを開くことを許され、多くの門人に西洋医学や博物学を伝授しました。門人に高良齋こうりょうさい、高野長英などがいます。

1826(文政9)年、オランダ商館長の江戸参府に随行します。140日余りの旅の間、訪れた各地で、医者や蘭学者などと交流して情報交換をしました。

1828(文政11)年、帰国を前に、禁制品の地図などを海外に持ち出そうとして(いわゆるシーボルト事件)、国外追放になりました。シーボルトに地図を渡した幕府天文方の高橋景保たかはしかげやすが死罪(実際は判決前に獄死)になります。この時、幕府に押収された地図は「カナ書き伊能特別小図」(展示パネル:地図11)と考えられています。景保は、伊能忠敬の師である高橋至時たかはしよときの長男です。

国外追放になったシーボルトはオランダに帰り、精密な日本図(展示パネル:地図12)などが掲載されている『日本』を出版し、西洋における日本研究に大きな影響を与えました。

1858(安政5)年、日蘭通商修好条約締結によって国外追放を解かれたことにより、1859(安政6)年、63歳のときに再び日本を訪れました。



岩崎常正『シーボルト肖像』(1826年)

出典:国立国会図書館デジタルコレクション
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2543107>)

勝海舟

(1823年～1899年)



勝海舟

出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

勝海舟(海舟は号、通称：^{りん た ろう}麟太郎)は、幕末から明治初期まで活躍した幕臣、政治家です。「^{ぼ しん せん ぞう}戊辰戦争」において、西郷隆盛と会見し、江戸城無血開城を成し遂げた立役者として有名ですが、幕府海軍の創設、発展にも多大の貢献をしました。

勝は若い頃から地理学など蘭学を学び、朝鮮、中国のみならず広範な世界認識を獲得する基盤を得たと言われています。そして、ペリー来航など外国軍艦の脅威が迫る中、近代海軍の建設等を提言した海防建白書を幕府に提出し、それが幕府の目に留まり、西洋式海軍技術修得のため創設された長崎海軍伝習所の一期生に選抜されました。そこで得た技能を活かし、遣米使節団に随行する軍艦「^{かん りん まる}咸臨丸」に乗って太平洋を横断し、近代海軍である米海軍の姿を目にして多くを学びます。

その後、軍艦奉行や海軍奉行並などの要職に就いて、近代海軍に必要な人材育成や艦船の整備のほか艦船の運用に有用な「^{だい にっ ぽん こく えん かい りやく ず}大日本国沿海略図(展示パネル：地図16)」を作製するなど、幕府海軍の建設に尽力します。明治期に入った後も、^{しょ だい かい ぐん きょう}初代海軍卿(後の海軍大臣職)に任命されるなど、幕府時代の貢献もあわせ「日本海軍生みの親」ともいうべき人物です。

長崎海軍伝習所と幕府海軍



「長崎海軍伝習所絵図」
公益財団法人鍋島報效会所蔵

1855(安政2)年から、オランダによる教師の派遣や練習艦の寄贈を受け、幕臣や諸藩から選抜された子弟を対象に長崎で海軍伝習が行われました。そこでは、航海術のみならず医学や気象学など幅広い教育が行われ、中でも海図を用いる地理学は、海軍技術移転の基本に位置付けられていました。伝習は、幕府の方針転換により、3年余りで廃止されますが、そこで学んだ卒業生は、その後、初めての海外への軍艦派遣となる^{かんりんまる}咸臨丸の太平洋横断航海を成功させるなど、近代海軍に必要な能力を獲得する上で大きな役割を果たします。

そして、幕政改革や幕長戦争(長州征討)などを経て、幕府海軍は新鋭艦を含む多くの艦船を保有するのみならず、士官の養成制度や艦船の造修、燃料補給システムの構築などにも着手し発展させます。これらのシステムは、幕府海軍の軍艦を引き継いで創設された帝国海軍の下で完成します。幕府海軍は、軍事組織における近代海軍建設の黎明期^{れいめいき}の役割を果たしました。

蕃書調所と開成所

1853(嘉永^{かえい}6)年のペリー来航による開国後、西欧諸国との交渉が増えたことを背景として、1856(安政3)年、江戸幕府が洋学研究・教育機関として江戸に設立したのが「蕃書調所」です。幕臣の子弟を入学させて、1857(安政4)年1月、開校しました。生徒は191人、当初の教授職には箕作阮甫・杉田成卿、教授手伝には高島五郎・東条英庵・川本幸民らがいました。授業は、最初は蘭学だけでしたが、英語・ドイツ語・フランス語も始まりました。英仏との修好通商条約では、それぞれの国から日本へ発出する文書については一定の猶予期間以降は自国語とすることが定められたこともあり、日本側での英語及びフランス語の習得が重要視されたのです。また、重要な外交文書や大量の文書処理、外字新聞翻訳、幕閣への情報提供、官板出版、出版物の検閲も任されました。

1862(文久^{ぶんきゅう}2)年に「洋書調所」、1863(文久3)年に「開成所」と改称します。1864(元治元)年の「開成所規則」では、オランダ語、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語の5ヶ国語のほか、天文学、地理学、窮理学、数学、物産学、化学、器械学、画学、活字術の9学科が定められました。幕臣のみならず諸藩からすぐれた人材が集められました。開成所の教官には、オランダに留学して法学や経済学を学んだ西周、津田真道らがいます。

「開成所」は明治維新とともに新政府に移管され、「開成学校」として再編されます。「開成学校」は東京大学へと発展します。



蕃書調所跡

所在地:千代田区九段南一丁目6 昭和館敷地内

つかもとあきかた
塚本明毅
(1833年～1885年)



「塚本明毅先生」
出典：国立国会図書館所蔵（「すぎうらゆずる杉浦讓関係文書」）

塚本明毅（通称：かんすけ桓輔）は、江戸の幕臣の家に生まれ、1855（安政2）年から海軍伝習のため長崎に派遣されます。他の伝習生が苦勞する中、数学の習得などで頭角を現しました。江戸に戻った後は軍艦操練所に勤務、その後、主に幕府の軍艦組で勤務することになります。そして、1861（文久元）年、かんりんまる咸臨丸による小笠原島の探索に参加、「小笠原母島測量図」を作製しました。

幕府崩壊後は、すんぷはん駿府藩の沼津兵学校の教授（後に頭取）を務め、日本で初めての数学の教科書「ひっさんくんもう筆算訓蒙」を執筆しました。

だじょうかんせい太政官正院（現在の内閣と似た位置付けの機関）への異動後は太陰暦から太陽暦への改暦や『へんさん皇国地誌』の編纂といった事業に挑みます。

前者については太陰暦の併記を継続するなどの漸進的な改革を成功させた塚本でしたが、『皇国地誌』の編纂については様々な理由でうよきくせつ紆余曲折し、結果、未完成に終わりました。しかし、『日本地誌提要』の編纂など、明治初期の日本の地理行政に大きな役割を果たしました。

すぎ うら ゆずる あら い いく の すけ
杉浦 讓・荒井郁之助

(1833年～1877年)

(1835年～1909年)



「杉浦讓肖像」

所蔵：山梨県立博物館



荒井郁之助

出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

杉浦讓（通称：愛蔵）も荒井郁之助も幕臣出身ながら、明治初期に内務省地理局で活躍した人物です。

杉浦は、幕末外国奉行の下で外交に活躍、1867（慶応3）年に徳川昭武の随員としてパリ万博に派遣された際に渋沢栄一と親交を深めた縁もあり、明治新政府（民部省改正掛）に召し出されます。郵便制度の創設や富岡製糸場立ち上げなど明治初期の制度構築を推進し、内務省地理寮（後に地理局）の長となりますが、1877（明治10）年に病死しました。マリア・ルーズ号事件後「芸娼妓廃止意見書」を提出するなど、開明的な一面もありました。

荒井郁之助も幕臣出身で、軍艦操練所で航海術を学び、高等数学を習得し「江戸湾実測図」の作製にも貢献しました。幕府海軍で活躍し、戊辰戦争では旧幕府側の海軍奉行を務めます。1869（明治2）年には新政府に出仕、北海道開拓使の測量で活躍します。1877（明治10）年、内務省地理局測量課長に就任、その後、初代中央气象台長に就任しました。幕府海軍で活躍しながら、水泳が苦手で、お酒が飲めず、甘いものが大好きで温和で謙遜家であったといわれています。



陸地測量部
所蔵：国土地理院

陸軍参謀局から陸地測量部へ

現在の国土地理院は、文官系である「民部官戸籍地図掛」^{みんぶかんこせきちずかり}（1869（明治2）年設置）と、武官系である「兵部省間諜隊」^{ひょうぶしょうかんちょうたい}（1871（明治4）年設置）の2つを起源とします。

その後、数度の改組を経て武官系の地図部門は陸軍省の参謀局に置かれました。陸軍卿 山縣有朋^{りくぐんきょう やまがたありとも}が軍政と軍令を分離するドイツ帝国陸軍の軍制を取り入れる改革を進めると、陸軍省から独立した天皇直属の機関として、1878（明治11）年、参謀本部が創設されました。

参謀局が参謀本部に改編されると、そこに地図課・測量課が設置され、1884（明治17）年には、それまで文官系で担っていた大三角測量事業が合流します。

1888（明治21）年における、「陸地測量部条例」の公布を契機に、参謀本部長指揮下の独立官庁として陸地測量部が置かれ、あわせて技官養成の修技所^{しゅうぎしょ}が併設されました。

アジア太平洋地域の地理情報を集めることにも従事し、「外邦図」^{がいほうず}と呼ばれる地図の作成にもあたりました。

こ すげ とも ひろ
小菅智淵
(1832年～1888年)



小菅智淵

出典：国土地理院所蔵「陸地測量部要覧」

小菅は、幕臣の関定孝^{せきさだたか}の次男として江戸に生まれました。幼いころから、漢学や武術にはげみ、22歳の時に小菅家の養子になりました。

その後、幕府の軍艦操練所や開成所で学びました。幕府軍と官軍が戦った戊辰戦争^{ぼしんせんそう}では、幕臣として榎本武揚^{えのもとたけあき}らと函館の五稜郭^{ごりょうかく}で最後まで戦い、敗れました。戦争の後は静岡藩にあずけられていましたが、新政府に招かれて地図や測量学に関係した仕事につきました。

明治十二年に国土地理院のもとになる、参謀本部測量課長となり、日本全国を測量し、地図を作る大計画を作りました。この計画は、のちに変更されましたが、小菅課長の遠大な計画がもとになって、今の三角測量や地形図の作成が行われました。

明治二十一年に陸地測量部ができると、最初の部長となり、念願の五万分の一地形図の作成が始まりましたが、その年の暮れの出張の帰りに病気で亡くなりました。国土地理院の測量は、小菅の計画から始まったといえます。

【国土地理院ホームページ「測量・地図ミニ人物伝」より転載】
<https://www.gsi.go.jp/KIDS/MEMORI/kosuge.htm>

やなぎ なら よし
柳 檣 悦
(1832年～1891年)



柳 檣 悦
所蔵：海上保安庁

柳檣悦は津藩出身の海軍軍人。初代水路部長、初代水路局長として、日本の水路測量技術の近代化を進め、「水路測量の父」と称されています。

開国が進んだ幕末期、日本近海で難破船が続出したため、各国の艦船が日本沿岸で測量を始めました。日本の中枢部（江戸城の構造）を克明に描いた「Gulf of Yedo」が英国から刊行されたことに見られるように、自国による測量と地図作製は国防に関わる重大な課題となりました。明治新政府も近代測量の重要性を認識しており、1869（明治2）年に招請した一人が、当時津藩の航海術指南役であった柳です。

柳は「海外の学術・技術を取り入れながら、日本人だけで海図を作成する」ことを目標・基本方針に掲げました。そして、日英合同で実施した水路測量事業を通じて英国の技術を学び、1872（明治5）年、「日本人のみの手による」初めての海図『りくちゅうのくに陸中國かまいしこうのず釜石港之圖』を刊行しました。

その後も海軍水路部門の構築や制度作り、国内外各地の測量などに尽力しました。

みんげい民藝運動の主唱者であるやなぎむね よし柳宗悦は、柳檣悦の息子です。

シルビア号



シルビア号
所蔵：海上保安庁

シルビア号は1866年竣工^{しゅんこう}の英国の測量艦です。

日本では、日本海軍へ測量技術を伝承したことで知られます。

19世紀後半、列強各国との海上交易が盛んになると日本は航行安全のための沿岸の正確な海図を作製する必要に迫られました。日本政府は当時世界最高峰の水路測量技術を誇った英国と、日本沿岸の共同水路測量を通じた技術伝承に合意。1870(明治3)年からシルビア号と第一丁卯丸^{だいいちていぼうまる}との日英合同の測量事業がスタートしました。

第一丁卯丸に乗艦^{やなぎなら よし}した柳櫓悦らにとってこの測量は困難を極めましたが、柳らの努力が実り、ついに1871(明治4)年、我が国最初の水路測量原図『鹽飽諸島實測原圖』^{しわくしょとうじつそくげんず}が完成します。同図はシルビア号の測量結果とほとんど一致し、同艦艦長セント・ジョンは「もはや他の助力を要せず」と絶賛。以降明治政府は釜石港を皮切りに、全国の海図の整備を自身の手で進めていきます。

おお じり ひで かつ
大後秀勝
(1840年～1901年)

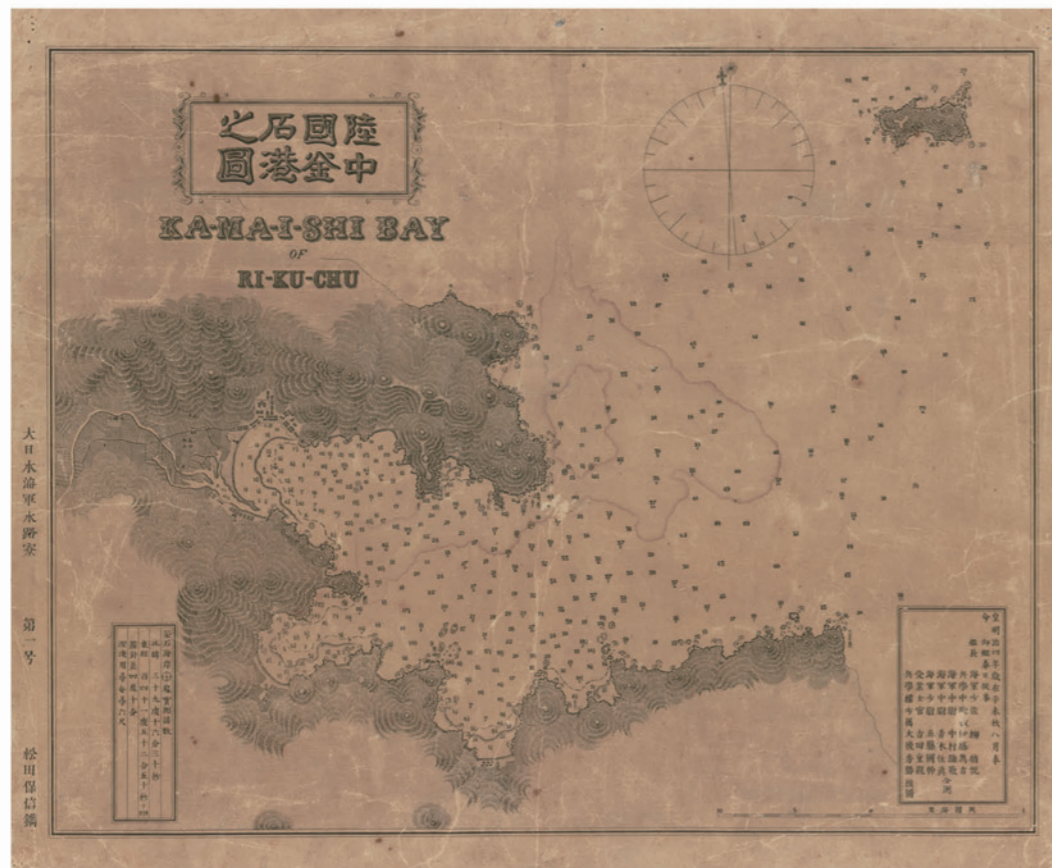
大後秀勝は、紀州藩の出身で、江戸幕府の講武所こうぶしょで砲術や測量について学びました。1870(明治3)年に兵部省軍艦操練所ひょうぶしょうぐんかんそうれんじょに出仕しました。

当時、海軍には近代的海図の製図法に素養がある者がおらず、絵画の素養があった大後秀勝に白羽の矢が立ち、1871(明治4)年の北海道の日英共同測量に参加し、シルビア号の測量士官ペーリー大尉から英式海図製図法の指導を受け、海図第一号りくちゅうのくに「陸中国かまいしこうのず釜石港之図」の製図も担当しました。

大後は1873(明治6)年に製図課長心得に就任、1876(明治9)年には製図課長に就任、明治初期の海図製図を主導し、1895(明治28)年まで海軍で勤務しました。

大後は、幕府お抱えの絵師であった狩野派かのうはの絵師を明治政府の海軍の製図掛せいずかかりとして雇い上げし、西洋式海図の表現法を研究させました。

また、大後は銅板印刷技術者の育成にも努めたとされています。



海軍省水路局「陸中国釜石港之図」(海図第1号)(1872年)
所蔵:海上保安庁

「大後秀勝摸図」とあり、大後が製図の責任者であったことがわかります。

せ わき ひさ と
瀬脇 寿人
(1822年～1878年)



「肖像画 手塚律蔵」
千葉県文書館所蔵(『瀬脇家文書』)

瀬脇寿人は幕末の洋学者で、明治初期の外交官です。元の名を手塚律蔵すおうのくに くま げ ぐん こ ず お う む らといい、周防国熊毛郡小周防村(山口県光市)に生まれました。長崎と江戸で蘭学等を学んだ後、佐倉藩に召し抱えられ、江戸で開いた又新堂塾ゆう しん どう じ ゅ くでは桂小五郎にしあまねや西周にしあまねなどが学びます。また1856(安政3)年には、幕府の蕃書調所ばん し ょ し ら べ し ょの教授手伝になりました。

明治に入り、外務省に出仕した瀬脇は、1876(明治9)年、欧米との交易が増え日本人商人が増え始めたウラジオストクの日本国政府貿易事務所の初代貿易事務官となりました。

瀬脇は、ウラジオストクに滞在するにあたり朝鮮情報の収集も任務として課されています。朝鮮から逃げてきていた元役人の金鱗昇けい りん じ り ゃ くとも親しくなり、朝鮮事情について『鷄林事略』を執筆しました。

また、ロシアの脅威などへの対応のため、「松島」(実際は鬱陵島うつりょうとう)を開拓し、そこを拠点とすべきと強く日本政府に主張し、1878(明治11)年帰国途上の船上で亡くなるまで、根気よく松島開拓の願いを上申し続けました。

はな ふさ よし もと
花房義質
(1842年～1917年)



花房義質

出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

明治初期の外交官として名が知られる花房は岡山藩出身、1869(明治2)年の外務省創設の頃から同省に出仕し、1880(明治13)年より朝鮮・漢城にあった公使館設置後初の弁理公使を務め、また在ロシア大使(1883年～1885年)等も務めた人物です。

花房は、日朝修好条規(1876(明治9)年)において、朝鮮側が、すでに日本公館が所在した釜山以外に二港を開港することを約束したことなどもあり、その後の開港交渉を含めた日朝交渉を担う一方、訪朝の際に、地理情報収集や水路測量等も実施しました。

花房が弁理公使とし漢城に駐在して2年後の1882(明治15)年、じんごじへん壬午事変(朝鮮国王実父のクーデター)が起こります。日本公使館も襲撃され花房も一時長崎へ避難するという事態が発生しましたが、その後の花房を日本側代表とする交渉の結果、朝鮮側による事件への謝罪、賠償金の支払いなどを含めたさいもつ ぼじょうやく濟物浦条約などが締結されました。

なお、壬午事変の謝罪のため来日したぼくえいこう朴泳孝は船上で韓国国旗を考案したとされますが、花房は、朝鮮の清からの独立を促すため、その考案にあたりきっかけを作ったとも言われています。

きた ざわ まさ なり
北澤正誠
(1840年～1901年)



北澤正誠

出典：国立国会図書館デジタルコレクション
松下軍次『信濃名士伝』初編より
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/992055>)

北澤正誠は、松代藩まつしろはんの出身で、幕末の著名な学者である佐久間象山さくま しょうざんの弟子でした。

維新後、明治政府に召し出され、左院さいいん（明治初期の立法機関）において民選議院についての調査にあたっています。1875（明治8）年に、左院が廃止されると塚本明毅つかもと あきかたの下で地誌編纂作業へんさんに関わります。

1877（明治10）年に外務省に出仕し、日本の古代から明治初年に至る外国との関係事項を列挙・略述した『外交志稿』がいこう しこうなどを編纂しました。

北澤の活動で特筆すべきは東京地学協会への貢献です。東京地学協会は、1879（明治12）年、欧州各国に存在した地理学協会をモデルに、地理に関する知識や知見を政治や外交のために活用していくことを目的として設置された団体であり、現在も地学や地理学の専門団体として継続しています。

北澤も同協会に初期メンバーの一人として参加、講演報告の選定や編集を担当するとともに、北澤本人も積極的に自らの研究について発表を行いました。

領土・主権展示館 企画展『日本の「かたち」を描く』小冊子

人物と機関

編集 領土・主権展示館

発行 領土・主権展示館

東京都千代田区霞が関3-8-1

03-6257-3715

2024年2月6日 発行

表紙図版 柳 檜悦 所蔵：海上保安庁



領土・主権展示館

NATIONAL MUSEUM OF
TERRITORY AND SOVEREIGNTY

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。